

皇后陛下の英語レッスン

コンスタンス・チャペル、メアリー・チャペル

私達姉妹のうち、メアリーが皇后陛下の英語のお勉強のお相手をするという光栄ある機会にめぐまれたのは、私達の日本滞在もほぼ終りに近づいた一九五〇年代でした。

生来いささか茶目っ気の抜けないメアリーも、そのころ奉職していた津田塾大学の同僚から、「官内庁があなたのことを調べているようです」とささやかれたときは、さすがに驚いたものでした。それまで皇后陛下の英語の御相手をしてきた米国の伝統的なクエーカー教徒のローズ女史が、帰国に際してメアリーを推したとのことで、メアリーはその後しばらくして、葉山の御用邸でローズ女史と共に親しく皇后陛下にお目にかかり、皇后陛下の英語のレッスンを担当することになりました。

ろ、「ローズ夫人はアメリカ人のせい、そのような作法はされませんでした。でもあなたはカナダの方ですから」と言われて、古風な御挨拶をしたのをよく覚えています。

皇后陛下は、授業の場では非常に熱心な「生徒」であられ、メアリーは皇后陛下御自身が授業のたびに常に厳格な学習の態度を維持されたことを、深い感銘をもって記憶しています。もっとも、授業の場を離れると、皇后陛下は実におやさしい気楽なお人柄の方だということに、メアリーはすぐに気づきましたけれども。

皇后陛下の英語学習への御熱心ぶりは、当時陛下と共に国内旅行の多かった中で、旅行中もメアリーに「宿題」を出すことすら求められ、英語の日記をつけられた一事にも示されています。



チャペル姉妹（日本経済新聞社提供）

日本で結婚したときは、まだカナダは日本と正式な外交関係をもっていなかったの、私達の両親は当時の東京の英国公使館で結婚式を挙げた、と聞きました。

私達は、そのころの東京で寺子屋式の英語教育を受けたあと、カナダのマウン・ト・アリソン大学を卒業して、再び日本に帰りました。帰国直後、明治天皇の崩御と、乃木大将御夫妻の自決という、日本にとつての歴史的な出来事に遭遇したことを、はっきりと記憶しています。その十数年前、当時青山学院にいた父に連れられて、ときの皇太子（大正天皇）御成婚の行列をかいまみた記憶もあります。

私達が両親について今も誇らしく思うことは、日本の開化時代に来た外国人の多くが、ややもすると一方的にキリスト教の教義や自分たちの文化を日本の人々に与えるという高い姿勢をとった中で、比較的早く、逆に日本と日本人の人々から学ぶことの多いこと

に気づいていたことです。母は当時の華族学校でも英語を講じましたが、おたがいには尊敬しあった関係の中での文化交流や教育の必要性を私達に教えました。

私達が東京で生れたころから、カナダ人による日本での教育文化活動はかなり具体化していました。そのころ、すでに東京（麻布）、静岡、山梨で英語教育に重点をおいた高等女子学校（東洋英和）が、

カナダ人のイニシアチブで開校しています。その後、一九一〇年になって、日本の教育者や米国の教会代表者にカナダの女性教育関係者が参画して設立されたのが、今日の東京女子大学ですが、カナダ人が東京女子大学の設立に際して果たした役割の大きさは、初代評議委員長がカナダ女性であったことにも、示されています。関西では、関西学院の創立にカナダ人が深い関係をもっていました。

これらのカナダ人パイオニアによる学校教育活動のほかに、野尻湖の開発で知られたノーマンさん父子等、日加文化交流に寄与された方々は、少なくありませんが、この機会にご報告したいことは、日本のYWCAの基礎を作られたミス・カウフマンのことです。

カウフマンさんは、私達姉妹よりも更にもっと永く日本で教育者としての経験をもち、YWCAと共に今日の日本の女子体育教育の普及につとめた方です。カウフマンさんは、御高令のため、今トロントの病院で神に召される日待つ昏睡の日を送っておられます。先日私達が見舞に行ったとき、何度か呼びかけてみましたが何の反応も示されませんでした。ところが私達と同行した日本の友人が、耳元でひとこと「せんせい」とささやいたとき、私達はカウフマンさんのお顔に明らかな反応と「瞬のはほえみが走るのをたしかに認めました。先生」という日本語のよびかけだけが、一瞬間、彼女の意識を呼びもどしたのです。（岩崎力氏——トロント市在住——要訳。一部は、昨年十二月十六日付日本経済新聞に掲載された。なお、元の英文テキストは当大使館の図書室に収められている。）